

## 思い出が詰まった博物館

伊原 幹治



大学博物館が創立90周年にあわせて、昨年5月に開館した。いろいろな感慨をもって同僚の先生と一緒に式典に臨んだ。長い間、中学・高校の講堂・チャペルとして使用してきた者にとって、これがどのような姿に生まれ変わるのか、大きな期待を持って見守ってきたからであった。

まず、この博物館の正式名称は「西南学院大学博物館」であるが、「ドージャー記念館」という別称が冠せられている。これからもわかるように、一番大きな特徴は、展示されている内容にもまして、W. M. ヴォーリズ（1880～1964）設計によるこの赤レンガの建物自体にある。西南学院に現存している最も古い、特別な思いをもって守られてきた学院を象徴する建物で、創立者の思い出を刻んだ歴史的建造物である。『西南学院七十年史 上巻』を読むと、1920年9月9日に定礎式が行われ、半年後の1921年3月9日に献堂式が行われている。その中で、南部バプテストミッションボードから学院へ寄贈され、以後、西南学院中等部本館として院長室や職員室、事務室など学院の中心的な役割を果たしたことが当時の見取り図からうかがえる<sup>(註1)</sup>。そして、戦後は中高の講堂として使用され、現在は福岡市の有形文化財に指定されている。

外からの印象は、連結していた東西の校舎がなくなったため、講堂が元の単独の建物に戻り、すっきりとまとまったことである。中高時代には取り去られていた二本の煙突が、保存されていた設計図から復元された。中に入ると、油くさい黒光りした床はもとのままで、その先にかつて自分たちが事務室や、研究室、校長室、宿直室などとして使ってきた部屋が新たな空間として生まれ変わっていた。ただ、赤レ

ングの外壁にからまったツタの量が減っていたような気がするのは、昔のチャペルの面影を追っているのかもしれない<sup>(註2)</sup>。

室内はさまざまな目新しい展示品のコーナーで、①聖書の民、イスラエルの歴史②聖書の写本③魔鏡④キリスト教の母胎としてのユダヤ教⑤キリスト教会の誕生と発展⑥日本におけるキリスト教⑦九州のキリスト教⑧ドージャーゆかりの品、で構成されている。

促されて、まず中央部分が磨り減って凹状になった階段を踏みしめて2階に昇って行くと、踊り場の辺りが随分と明るいのに気がついた。私たちが使用していた時には、チャペルの南側面を除いて他の三方面に建物があつたために全体的に薄暗かつた。そこに朝日が差し込んでくると、光と影のコントラストが美しく、天気がいい日には誰もいないチャペルでよく写真を撮った思い出が甦ってきた。現在のチャペルは光にあふれている。

2階部分は、オルガンがなく（今はある）、椅子の数が減りガランとした感じであつた。高校生時代には、自分はどの辺りに座っていたのだろうかなどと考えながら、昔懐かしい硬い椅子に腰を下ろし室内を見回すと、やはり明るさが違うなあとと思った。天井には蛍光灯に代わって当時の照明が復元されていた。椅子の背もたれには、中学や高校の生徒たちの落書きの跡がそのまま残されていた。ちょっと恥ずかしいような内容もないではないが、それらも含めて博物館なのであろうか。そして、今の講壇に比べると改めて高いなあの印象をもつた。

更に目を上げると、そこに掛かっていた下瀬加守牧師によって書かれた「西南よ基督に忠実なれ」の額がないのに気付いた。それはこの部屋に足を踏み入れたときから感じていた違和感でもあつた。この額は、後に学院の倉庫に保管されてあるのが見つかったが破損しており、中高で引き取り表装し直して、現在は中高校長室の入り口の壁に掛けられている。さらに、講壇の左右に掛けられていた二枚の聖句を入れた額もなくなっていた。それは、「汝の若き日に、汝の造り主を覚えよ」という文語訳聖書「伝道の書」12章1節と、「神はその独子を賜ふほどに、世を愛し給へり」という「ヨハネによる福音書」3章16節

の聖句であった。この額も倉庫で発見されたが、中の聖句は残念ながら行方不明である。この建物を永く使用し守ってきた中高の関係者やこれらの額がチャペルの中心的なものであるとの印象を抱いてきた卒業生にとって、これはがっかりであった。創立当初の姿に戻すことに主眼があったようであるが、これらも含めて学院の歴史であり博物館であるならば、それなりの対処の仕方がなかったものであろうかとの気持ちを禁じ得なかった。

私にとっては、ここで過ごした時期が人生の揺籃期であると同時に、また後に職場ともなったのであるが、不思議と昔のことの方を思い出す。卒業生の誰もが、それぞれ様々の感慨を持って思い出にふけるのではないだろうか。ある時はチャペルでの故清水実先生の熱のこもった説教であり、内海敬三先生の讚美練習やオルガン奏楽であったり、また度々説教をしてくださった故木村文太郎西南学院教会牧師や、歌や演劇などを含む外国からの多彩なお客さま、あるいは特別伝道集会（後ミッションウィークと改称）の滋賀県止揚学園の福井達雨牧師など、また文化祭の弁論大会や演劇などの催しや、その他、様々な思い出がよみがえってくる場所である。

1965（昭和40）年4月に入学した私にとっては、高校に入って迎えた最初の文化祭で、このチャペルで行われた先輩によるエレキバンドの演奏は衝撃的であった。それまでTVでしか見たことがなかったドラムやエレキギターの耳を覆わんばかりの強烈なベンチャーズの曲などの演奏であった。暗幕で窓が覆われ、ぎっしりと立錐の余地がないほど観客で埋め尽くされ、階上のバルコニーが落ちるのではないかと心配された。私は立ち見であった。いつもとは違ってその日は女子生徒の姿も多く、きゃーきゃーと普段聞き慣れない叫び声が特別な日であることを演出していた。バルコニーからは3年生であろうか、悪のりした先輩がトイレットペーパーをテープ代わりに投げ落としていた。陶酔感に満ちたひと時であった。西南は、そのような新しい文化を私に体験させてくれた学校でもあった。

さて、吹き抜けとなった最上階の3階はすっかり椅子が取り払われ、

段差もなくなっていた。3階の椅子のほとんどは現在中高に運ばれ、修理されて廊下に設置されて、生徒たちの団欒や休憩の場になっている。新しい校舎に黒光りした古い椅子が奇妙にマッチしている。そして、この椅子から現在の中高チャペルの十字架が卒業生によって作られたのである。また、現在の中高のチャペルは、この古い講堂の形を基本的に踏襲して2階建構造になっている。そして、下瀬牧師の額にかわって、正面の壁には Seinan, Be True To Christ の英文の文字が刻まれた。こうやって、古いチャペルの伝統が受け継がれ、ここに西南の新しい歴史が刻まれているのである。

この博物館は物珍しい品々を展示するだけではなく、卒業生にとって懐かしい思い出がぎっしりと詰まったタイムカプセルのような博物館である。あなたも一度、足を運んでみませんか。

(注1) 『西南学院七十年史 上巻』293～296頁

(注2) 更に、旧院長室には奉安所があり、この扉の上に菊の紋章が付けられていた。『西南学院七十年史 上巻』の417～421頁には、故水町義夫院長の時代の1937年4月に御真影が「奉戴」され、ここが奉安所になったことが記されている。

後1943年以降に、「御真影は先に述べたように、院長室に安置されていたが、院長室は一階にあったため、二階にある講堂への昇降に際して騒音があり、御真影に対して不敬にあたること」(484頁)などの理由で、募金によって、この建物の外、玄関脇の現在泰山木が植えられている辺りに、神明造の奉安殿が建てられたようであるが、学院史には図があるが写真は掲載されていない。敗戦の時に、誰かがやってきてこれを焼いたと聞いている。

この最初の奉安所は扉の上に菊の紋章が付いた状態で残されていたが、戦後、故木村良熙高等学校長が執務室として使用していた時に取り去られた。